芋の上のクモ

志村つるぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
芋の上のクモ

【Ｎコード】
Ｎ９３８２Ｉ

【作者名】
志村つるぎ

【あらすじ】
現代日本、とある芸術大学。
蜘蛛の巣と呼ばれる舞台芸術科の学び舎で天野教授に師事する春菜。
自己中心的ではあるが才能溢れる天野のお気に入りとして春菜はいいように扱われている。
近未来日本。とある科学技術大学。
周囲をジャガイモ呼ばわりして見下している新入生のはる子。
彼女は新歓コンパの場でジャックという男にハッキングされ、彼の

主催する科楽部に入部するよう強制される。
負けん気の強いはる子は逃げずに入部するが、彼女を待っていたのは大きな子供・ジャック部長の天才的スキルを駆使したワガママのお手伝いだった。

現代「蜘蛛の巣」と近未来「ヤングポテト・セカンドフライ」という二つのストーリが交互に繰り返されてゆき、そして春菜はある決断をする。

蜘蛛の巣1

蜘蛛の巣1

ポットのお湯をマグカップに入れて、スプーンでぐるぐるかき回しながら椅子に戻った。中身はポタージュスープ。天野先生の研究室で徹夜した明くる朝の、定番メニュー。

「春菜、今からマンション行ってもいい？」

天野先生がパソコンの向こうから、眠そうな声で聞く。

「もう朝ですよ。今日一限から講義でしょ」

わたしがそう答えると、天野先生はコロコロのついた椅子を滑らせて、わたしの隣までやってきた。

「休講にできないかな。おれ、もう限界だ。途中で寝てしまうかも」

言いながら、わたしの肩を抱いて鎖骨のあたりに顔を埋める。わたしはマグカップを机の上に置いて、少し白髪が交じり始めたその髪の中に、そっと指を差し入れる。

資料作成を手伝ってくれ、というのはこの時間のこともちろん含まれてる。十五歳も年下のわたしに、徹夜明けの天野先生はいつもこうして甘えてくれる。

「ベッド、出しますか？」

耳元で聞いてみる。返事はない。天野先生はわたしの首筋に湿った唇を押し当てた。わたしは部屋の隅にたたんである簡易ベッドを横目で見ながら、椅子の上で天野先生に応えた。

研究室を出ると、すっかり明るくなっていて、わたしは目を細めて空を見上げる。

舞台芸術科の五階建ての建物は六角形で、真ん中が吹き抜けになっている。それを取り囲む形で研究室と講義室が並んでいるから、わたしたち学生はこの建物を「蜘蛛の巣」と呼ぶ。

蜘蛛の巣の地下には大きなホールが体をひそめている。わたしはそのホールに向かうため、エレベーターを呼んだ。
五月の空は高い。青い空から逃れるようにして地下に下りていく自分が恥ずかしかった。
午後三時から、天野先生による舞台芸術制作概論の講義がホールを使って行なわれる。実際に音響、照明をつけた役者による演技を学生に見てもらうため、今朝は早くから舞台設営をしなければならない。
学部生向けの講義なので、わたしを初めとする院生がスタッフとして働く。わたしは舞台監督を任されていた。
ホールに入って、昨夜徹夜で準備した講義の配布資料をホチキス止めしていると、四月から院に上がってきた一年下の男子がやってきた。
「おはようございます、小泉です」
「ああ、音響の。よろしくお願いします、舞監の木津です」
わたしは挨拶して、時計を見る。七時四十分。集合時刻の二十分前。
「偉い。早い。助かるわ」
小泉くんは照れくさそうに笑ってから、ホールを見回した。
「ホールでオペするの、初めてなんですよね。いつもは小劇場ばっかりなんで。嬉しいですよ、だから早く家出ちゃって」
「芝居自体はほんの五十分だけよ。あとは天野先生がぺらぺら喋るんだから」
天野先生書き下ろしの脚本を院生の役者が一週間で練習して、今日の本番にのぞむ。毎年違う学生を相手に五十分の芝居をするのだから、同じ脚本を使えばいいのに。先生は同じ脚本だとスタッフである院生がダレる、と言って、毎年違うものを書く。
「今回の脚本、一晩で上げたって本当ですか？」
小泉くんが、音響機材に電源を入れながら聞いた。
「そうよ。一晩。あの人の頭の中、どうなってるんだろうね」

「すげー。やっぱ天才」
自分のことを言われたみたい。心の中で笑いが止まらなくなる。天野先生が書いているとき、一晩中隣にいたのはわたしだ。わたしだけが、パソコンに向かって書く天野先生のしかめ面を知っている。
「小泉くんも、脚本書くの？」
わたしが聞くと、彼は配線チェックの手を止めて答えた。
「いえ、ぼくは制作のほうです。ダンスとか演劇の興行プロデュースをしたいと思ってます」
小泉くんはそこで、へへへ、といたずらっぽく笑った。
「でも実は、ミーハー的に天野さんの芝居が好きだったから、院に残ったんです。院生になったら、いっしょに芝居作れるでしょ、今日みたいに。夢のようだな」
天野先生は現役の脚本家、演出家でもある。わたしが入学した年には客員教授だったが、二年前から研究科の主任教授になった。
「おはようございます」
振り返ると、入り口にかしこまって立っている男がいた。
「おはよう。舞監の木津です。入ってください」
中に入った男の顔を見て、小泉くんが、おう、と声を上げた。やはり一年下のスタッフらしい。わたしも顔にだけは見覚えがある。
「照明オペの菅原です。よろしくお願いします」
「もう少ししたら他のスタッフも来ると思うんで、人数集まったら吊り込みに入ってください。照明プランは上がってるよね」
菅原くんは鞄からノートを出して、わたしに広げて見せた。几帳面に高さの揃った字が並んでいる。２Ｂくらいの濃い鉛筆。
「こっちはキッカケ表です。抜けてないか確認してください」
その声を聞いて、小泉くんがオペ室から降りてきた。
「おれにも見せて」
小泉くんは、菅原くんの丁寧な表を見ながら、自分のノートにその場で書き込んでいく。小泉くんの字は女の子みたいに丸みを帯びていた。

集合時間が近付くとスタッフが揃い始める。照明は吊り込みを始め、大道具の作業も始まって、会場中が騒がしくなった。わたしは客席に座って、タイムテーブルとにらめっこしながら指示を出し続けた。

昼前になり、役者と、午前の授業を終えた天野先生がやって来た。天野先生の顔は精悍で、寝ていない人とは思えない。すっかり本番モード。歩く速度も速い。さっさと舞台に上がり、端から端まで何度も歩いた。

「よし、春菜、場当たりやって」

舞台から飛び降りて、わたしの隣に座った。「場当たりいきます。客入れから最初の暗転、シーン1冒頭まで。音お願いします」

客入れの音が流れた。講義は芝居から始まる。学生を客に模して、時間が来たら暗転。

天野先生はわたしの隣で、役者の立ち位置や音量、照明について指示を出した。その目は鋭く光っていて、暗い客席で見ているとつい、今朝の体の感触を思い出してしまう。わざと鉛筆を落として拾う姿勢で天野先生のひざに頬をくっつける。天野先生はまったく気付かずに、舞台に集中し続けた。

「三十分お昼休憩挟んでゲネプロ準備に入ってください。十三時半スタートです」

午前中のスケジュールが終わり、わたしが立ち上がってそう言うと、緊迫していた空気が一気に緩んだ。スタッフや役者が昼食をとるためホールを出たとき、天野先生がわたしの手首をつかんだ。

「終わったら院生全員で飲みに行くから、どっか予約しといてくれ」

わたしは面食らった。

「授業なんだから打ち上げは必要ない、って言ったの、天野先生ですよ。今から予約って、この人数無理でしょ」

すると天野先生は、さっきまで舞台を見ていたのと同じ鋭い目で、わたしをにらみつけた。

「口答えするな。おれがそうしろって言ってんだから、おまえはそ

の通りにすればいいんだよ。何とかしろ」
強くつかまれている手首が、熱くなった。あたたかい体温を思うと、わたしは何の反論もできない。
「そのあと、うちに泊まってくれるの？」
わたしが聞くと、天野先生が目を、やわらかく少し細めた。
「当たり前だろう」
内腿がかすかに震えた。わたしは彼の胸に体を預けたくなる衝動を抑えて、うなずくだけにした。
「わかりました。近くの店を押さえます」
手首が解放された。わたしは天野先生を一人残して、ホールを出た。天野先生は小屋に入ったら、幕が上がるまでそこから出ない。わたしは二人分のお弁当を買って、ホールに帰った。何人かがおにぎりやサンドイッチを食べながら、談笑している。お弁当を渡そうと天野先生に近付くと、すでに何か食べていた。
「何食べてるんですか」
聞いたものの、すぐにわかった。昨日研究室に持って行った、わかさいもだ。北海道の実家から送ってきた洞爺湖温泉の銘菓。
「芋だから昼飯になると思ったけど、これ芋じゃないんだな」
わかさいもは焼き芋の形をしている、あんこ入りのお菓子だ。天野先生はわたしの差し出したお弁当を見ると、わかさいもを袋に戻した。
「いくら何でも甘すぎる」
「ほんとの焼き芋だったらよかったですか」
笑いたいのをこらえて聞くと、天野先生は首を横に振った。
「実は焼き芋よりフライのほうがいい。実家に言って男爵を送ってもらえ」
「わかさいもを揚げてみたら？」
「食えるか、そんなもん」
天野先生がお弁当を開けて箸を割ったので、わたしはそれ以上の軽口をやめた。

携帯電話を持って電波の届くところに出る。打ち上げの予約が取れたのは、三軒目に電話したチェーン店の居酒屋だった。また食い物がまずい、なんて文句を言うのだろうな。けれどそのあと部屋に来てくれる天野先生は、きっととても優しい。

舞台監督として、しっかり仕事をやり遂げたら、すごく褒めてくれるだろう。あの低い甘い声で、わたしは優秀だと囁いてくれるだろう。

お弁当に手をつける暇もなく、ゲネプロの準備に入る。わたしはまた天野先生と並んで客席に座り、舞台を見上げた。

間もなく、幕が上がる。

ヤングポテト・セカンドフライ1

ヤングポテト・セカンドフライ1

はる子はジャガイモに囲まれていた。毒の芽を持つジャガイモならまだ良かったのに。洗えばそのまま食べられる新ジャガみたいな可もなく不可もないツマラナイ奴ら。心の底からはる子は思う。カーボンナノチューブ製メガネフレームに収まった新円レンズの内側だけが明滅する。はる子の視線移動と瞬きに合わせてレンズ埋込型ディスプレイがその表示を変化させる。まだ始まって15分しか経過していない。早くこのクダラナイ新歓コンパが終わらないかしら。それにしても、ふう。何でジャガイモなのよ。北端先端科学技術大学だから？　あたしが南端先端科学技術大学に入学してたらサツマイモみたいな奴らに囲まれてたってこと？　それにしても、ふん。北端と聞いてジャガイモを連想するなんて、あたしも前時代的な環境適応型農業のイメージから脱却できていない証拠だわ。はる子は素早く視線を走らせる。レンズディスプレイが四方の各先端科学技術大学周辺を産地とする農作物の年間生産量順リストを表示する。どこもかしこも似たような生産物と生産量。農業用閉鎖環境ピコプラントによる近代的アグリカルチャ。うん？　北端農作物生産量ランキング1969位、心臓主義農場によるハーティストのための自然有機農法によるジャガイモ、0．2トン。ハハハ！　昔ながらのアグリカルチャ。非効率の極みだわ。それにしても、ふふふ。こんな意味のないデータを表示させるような操作しかできないんじゃ、まだまだ駄目ね。最速のヒューマンインターフェイス入出力速度を誇る視線トレースターゲッティングシステムも、目を慣らさなきゃ全然だわ。しばらくは去年まで使っていたハンドヘルドコンピュータも共用した方がいいかしら。ヘルドコンピュータ達に思いを馳せるはる子がレンズディスプレイからその先のビールに焦点を合わせ

ようとすると、右隣に座っていた男が急に立ち上がった。はる子とジャガイモ共を新歓コンパまで引率してきた同じ学系の先輩だ。黒いアフロヘアと精悍な顔付きと１９０ｃｍはあろうかという身長以外は丸メガネをかけた普通の日本人。

「ハロハロ、エブリバディ。ピコテクノロジー学系入学おめでとうございます。ええと、僕はこちらに座られている杉山超進学系長の研究室に所属してるジャックと言う者デース。セルフイントロデュースタイム＆スプリングハズカム！　皆様のお名前、大学でやってみたいこと、趣味・特技などを発表して下サイ。あ、杉山先生には最後にクローザのお言葉を頂きますのでヨロシクお願いします。恥ずかしくって皆の前じゃ話せないっていうシャイボーイ＆ガールは、後でカツ丼を食べながらゆっくりと吐いてもらいます。キャハハ」

お互いに探り合い状態ではあったが、それなりに騒がしかった新入生達が一斉に押し黙る。カツ丼？　はる子は「カツ丼」「吐く」で素早く検索をかける。ああ、旧世紀の警察機構で取調べ中の容疑者を懐柔する際に使われた古典的手法、か。あたしが知らない昔話をジャガイモ共が知っているわけないじゃない。誰に向かって話してるつもりかしら、この先輩。馬鹿じゃないの？　それにしても、やれやれ。自己紹介、ね。本当に後輩思いの先輩で涙が出そうになるわ。無表情な顔ではる子がジャックの横顔を見上げていると、彼は急にはる子の方を見て言った。

「じゃあ、トップバッター、メガネピカピッカーチュウ。背番号６９。そう、君から」

はる子は顔を真っ赤にして立ち上がった。ビール一杯で酔っ払うほど弱いわけではないし、ましてやジャガイモ共の前で自己紹介することに何の気後れもない。しかし顔の皮膚表面の水分がどんどん蒸発して砂漠化していくのを感じながらはる子は口を開いた。

「田中はる子です。エクソダス計画に興味があって、惑星改造ピコプラントの研究をしたいと考えています。趣味は自然有機農法ジャガイモ栽培、特技はジャガイモ料理です」

口の回転数が上がるにつれて、はる子の顔から赤みが引いてゆく。最後には誰にも気付かれずに皮肉を言う余裕も生まれていた。しかし、はる子がふと右隣りを見ると、まだ立ったままのジャックが白い歯を覗かせながら満面の笑みを浮かべている。

「サンキュー、はる子。まだまだ硬式イントロトロデュースだったけど、トップバッターの役割は出塁すること！　今のは正直言って内野ゴロなんだけど、ジャガイモボールの不規則な形状がイレギュラーを誘ったね！　ナイスポテトヒット！　ファーストセーフ！　次行ってみよう」

この男はどこまで気付いている？　はる子は座布団の上に腰を下ろしても、ジャックから視線を外すことが出来なかった。メガネピカピカということは、あたしがヘッドヘルドコンピュータで色々していたのは気付いていたのだろう。でもあたしが周りをジャガイモ呼ばわりしていたのは分かるはずがない。ジャガイモボール？　ポテトヒット？　あたしの考えすぎだ。しかしはる子の心に一度巣食ってしまったモヤモヤとする灰色の雲は中々消えてくれない。それを振り払おうとはる子は視線を激しく動かし、瞬きを続ける。あたしに恥をかかせたジャックという男について調べ上げるために。そして認めよう。あの男だけは他の男爵イモ共とは違うってことを。少なくとも侯爵イモくらいには考えておいてやろう。でもね、そう、これは負けなんかじゃない。あたしは負けてなんかいない。

オートリンキング・ループ数３８４回転。６σ確保。リングリンク数３回転。「北端先端科学技術大学」「ピコテクノロジー学系」「ジャック」に関するウェブリングリンクリサーチ開始。…検索結果、３件。はる子は直感的に少なすぎると感じた。それでもはる子は藁をも掴む思いで各検索結果に目を通す。一件はジャックが所属する研究室のホームページ。そこでは彼が２８歳で博士後期課程一年生ということしかわからない。残り二件はジャックの学士・修士論文のタイトルが判明しただけで、肝心の内容についてはアクセス

制限されていた。それにしても、情報が少なすぎる。そこには何か作為性があるような…。ドッキンドッキン。レンズディスプレイ上の心臓の絵の明滅とその鼓動が、メールの受信を知らせてくれる。はる子はフウとため息をつく。すると直後にはる子の意思とは無関係にメーラが強制起動して一通のメールが開かれた。

送信者／ジャック・A
日時／25年4月10日　20時32分
宛先／田中はる子
件名／わかさいも
本文／ヘイ、ジャガイモガール！　どうやら君は僕のことを好きになっちゃったみたいだネ！　僕のことを調べてるってわざわざわかるように、ウェブ上に蜘蛛の足跡ペタペタ残しまくりだなんて！　でもね、僕はリアルの付き合いを大事にしたいオールドタイプ。僕との仲を深めたいなら直接会って体と体、肉体言語で語り合わない？　キャハハ。それが嫌なら「科楽部・噂まとめ」ってサイトにゴートゥー中華でイッチャイナ！　ああ、そうそう、北端銘菓「わかさいも」って知ってる？　旧世紀から連綿と続くとっても甘ちゃんでねちっこいやつなんだけど、誰かを連想させるよな。ギャハハ！
ちなみに僕は「わかさいも」が大好きサ。イモらしさを再現するために白餡の中に昆布の繊維を入れるあたり、中々芯のあるやつだって感じちゃうよネ！　それじゃあ、チャオ。ヤングポテトガール！

自己紹介も一巡し、賑やかな宴会場ではる子は一人、肩を震わせていた。隣りに座るジャックが白い歯を覗かせたまま口の端を吊り上げ、何ともいやらしい笑みを浮かべながらはる子を見ている。
「どうしたの、本年度首席入学の田中はる子ちゃん。んん～？　科楽部・噂まとめは見てくれたかな。んん～？　キャハハ」
ジャックの白い歯と歯の間の暗闇に吸い込まれるようにはる子は静かに崩れ落ちた。

「あ、先生、この子、体調不良にもかかわらず呑み過ぎちゃって困るのガール！　なんで、僕が送りウルフ！　ガルル～」
「おいおい、ジャックくん、タクシー代は出してあげるから、本当に送るだけにしてくれよ。あとね、それを言うなら送りウルフじゃなくて、送りバントウルフと言ってだね、私の方にも回してもらわないと。ワハハ」
「オウ！　さっすが先生！　いつも正しい日本語を教えて下さってアリガトゴザマース。また一つネイティブにグングン接近初めてのチュウ…」
　薄れゆく意識の中でこうなる原因を作ったはずのジャックと杉山超進教授の会話だけが、何故だかはる子には温かなものに思えた。

…「学内ええじゃないか事変」は２３年に北端先端科学技術大学で発生した集団幻覚事件である。学生や教職員が数分間だけ「ええじゃないか」と声を上げ踊り狂ったと言われているが、実際にそれを体験したと思われる人間も不思議とその時の記憶を留めておらず、正確なところは不明である。ただし、何故かは分からないが某倶楽部のＪ氏が関与しているのではないかという噂だけが一人歩きしている。その他にもＪ氏は２２年の「学内十戒事変」への関連を疑われているが、やはり確固たる証拠は存在していない…。

　はる子が目を覚ますと、そこは見た事もない部屋のベッドの上だった。あたしは新歓コンパ中に右隣の男にハッキングされ、無理矢理メールを読まされ、あたし自身でさえ知らないようなことを聞かされ、あのいやらしい笑みを見て気を失った。服は着ている。ここはどこ？　先ほどの変な夢は何？
「やあ。僕のチュウが無くてもお目覚めできたね、カッパッパ呑んじゃったガール。君を僕のウチまで連れてくるのは大変だったヨ」
　ベッド脇に置かれた椅子に腰掛けるジャックの声だった。
「あたし、そんなに呑んでません。それに助けてなんて言ってない

し」
「オウ！　連れないなあ。そんなにツンツンするのが好きなら僕のジャニーズジュニアでズンズンしてあげようか！　キャハハ。そうそう睡眠学習で僕の主催する科楽部についての断片情報を夢見てくれた？　そして餅のロンで入部してくれるよねえ？」
　はる子はジャックの蜘蛛の巣に囚われている自分を感じながら頭を抱えた。それにしてもこの男は、男爵でも侯爵でもないわ。少なくとも伯爵イモくらいには考えておかなきゃ。

蜘蛛の巣2

蜘蛛の巣2

夏に入ろうとしていた。梅雨のじめじめした季節から、切れ目なく夏に移行してしまう。梅雨に取り残されたままの湿気が体にまとわりついていた。

天野先生が公演のためにイギリスへ旅立ったのは、昨日のことだ。ホールで行なわれた授業のあと、すぐに天野先生は海外公演の準備に入ってしまい、授業のある日以外は学校にも来なくなってしまった。わたしは何度も電話したが、それに応じて来てくれたのは数えるほどで、いつも身勝手に連絡なしでマンションにやって来るのが嘘のようだった。

いつもなら天野先生は、自分の演出する舞台にわたしや数人の院生を連れて行き、勉強しろと言って手伝わせてくれた。それなのに、天野先生にとって初めての海外公演は練習を覗かせてもらえないどころか、公演にも来るなと言われていた。

「どうして行っちゃいけないんですか？　旅費だせとか言わないのに。ちゃんとチケット買って、見に行きたいって言ってるのに」

練習の見学にも呼ばれない鬱憤が溜まりに溜まって、わたしは出発直前に会いに来た天野先生にそう言った。本当に見たいのに。天野先生の公演は全部見たいと思ってるのに。

「帰国してからの凱旋公演が決まってるんだから、そっちに来ればいいだろう」

天野先生は不機嫌そうに言った。

「今年卒業なんだから、おまえはもっと勉強しろ」

「勉強したいから公演見たい、って言ってるんじゃないですか。わかった。そんなに来て欲しくないってことは、キャストかスタッフの女に手を出したんでしょう。わたしが来ると、ややこしくってた

まんないんでしょう」
　わたしが半ば本気で責めよると、天野先生はますます不機嫌になって、「帰る」と言い出した。
「図星なんだ。ずるい。汚い。全然来ないと思ったら、ちゃんと女がいるんだ。そりゃあモテるでしょうよ、先生は」
　このままイギリスなんかに行かれたらたまらない、と思っているのに、引き止める言葉が見つからなかった。わたしはわあわあ言って、天野先生に睨みつけられた。
「うるさい。勝手に勘違いしてろ。おれは芝居しに行くんだ。浮気旅行に行くんじゃない。夏休み明けにうちのゼミで公演打つんだから、その準備をちゃんとしとけ、って何度言ったらわかるんだ」
　わたしはふてくされたままで、天野先生を見送った。
　たしかに、夏休み明けすぐにゼミの公演がある。脚本は天野先生のものだけれど、演出は院生に任せられる。今回をたたき台にして卒業制作のプランを作らなければならない、大切な公演だ。
　スタッフのチーフはそれぞれ専門コースの学生の中から選ぶ。今日はそのための会議が行なわれるのだ。天野先生のいない蜘蛛の巣に行って、第一研究室のドアを開けた。
　部屋に入ると、すでに大半の院生が集まっていた。
「じゃ、そろそろ始めよっか」
　時計を見て演出の早坂くんが言い、スタッフ会議は始まった。
　音響、照明、道具、衣装メイクと、どんどんリーダーが決まり、チームができていく。最後に脚本コースの学生が残った。どこかのスタッフに入らなければならない。わたしも残された一人だった。
「春菜はこのまえ舞監やったからさ、今回違うほうがいいよね」
　舞台監督は専門コースがないので、脚本コースの学生からその都度選んでいた。わたしは舞台監督をするのがキライじゃない。演出を除けば、天野先生といちばん近くで仕事ができるからだ。
「わたし、舞監やってもいいけど」
「えー、悪いよ。だって天野先生のパシリじゃん」

その言葉で全員が笑った。
「困るよね、いくら専門の人間がやってないっつっても、仕事任せて欲しいよね。うちのは天野先生の傀儡だからさ」
「ふつう舞監つったらスタッフのボスだぜ」
「春菜も今度は自分でプラン組む場所に行きたいでしょ？」
わたしは首を振った。
「舞監けっこう面白かったよ。それに、どの部署も最後は天野先生の監督下でやるんだし」
「一から作って最後に添削受けるのと、最初から仕事与えられるんじゃ、全然違うけどね」
早坂くんが言うと、みんながうなずいた。
「まあな、春菜は教授のお気に入りだから、いいんじゃないの」
照明班の男子がそう言った。数人が嘲るような笑い声を立てる。わたしが天野先生に可愛がられてるから、ここにいる全員が嫉妬してるんだ。わたしは唇を噛んで下を向いた。
結局また舞台監督に決まった。あとの時間は各スタッフに分かれ、下につく院の一年生も含めてプランを立てることになった。
わたしの下には先日の授業でオペレーションを担当した小泉くんと菅原くんがついた。
「舞台監督って、何するんですか」
「聞いてたでしょ。天野先生の言う通りにしてればいいの」
わたしはさっきの応酬の余韻から抜け出せず、投げやりに答えた。
「じゃあ、天野先生が帰国するまで仕事はないんですね」
菅原くんが真面目な顔でそう言うので、わたしは笑ってしまった。
「定期的なスタッフ会議の開催は、舞監の仕事です。あと練習にはできるだけ顔を出してね」
活発に話す他のスタッフとは違い、わたしたちにはすることがなかった。
「今日はもういいや」
わたしたちは連絡先の交換をして、解散することにした。

研究室を出たとき、小泉くんがわたしにだけ聞こえるよう、そっと囁いた。
「木津さんって、天野先生のお気に入りなんですか」
わたしは小泉くんの顔をじっと見た。視界の端で、菅原くんが階段に消えた。
「さあ、わたしにはわからないけど、よく言われる」
そう答えた瞬間、さみしさがこみ上げた。天野先生が遠いところにいる間、わたしはこの蜘蛛の巣でひとりぼっちだ。だれもわたしのことを大事にしてくれる人がいない。
「わたしのせいじゃないのに、ああいうこと言われたら、わりと傷つくのよ。なんか、フェアじゃない」
わたしは小泉くんの手を取って、軽く握った。彼は幼さが残る細面の顔に、不思議そうな表情を浮かべた。
「一人で帰るのがイヤになってきちゃった。帰ってもひとりぼっちだし。一緒にご飯食べない？」
小泉くんは不思議そうな顔のまま、うなずいた。わたしは握った手に力を入れた。
「ありがとう」
目の奥を覗き込むと、小泉くんは目を逸らして歩き始めた。
わたしたちはカウンターに並んでお酒を飲んだ。ビール一杯で小泉くんは真っ赤になった。わたしは腕を絡めてみた。小泉くんは拒否しなかった。さみしさが少し和らいだ。彼の肩に、体重を預けてみた。彼は弱々しくわたしの肩を抱いた。目線を上げると唇が近かったので、軽く自分のものを重ねた。
「そろそろ、出ましょうか」
天野先生ならそんな性急なことを言ったりしない、とわたしはまだ天野先生のことを考えていた。けれども言われるままに店を出て、そのまま小泉くんのアパートに行った。
わたしたちはワンルームのその部屋に入るなり、ベッドに倒れ込んだ。ベッドの上から小泉くんはエアコンの電源を入れた。小泉く

んの部屋は散らかっていたが、不潔ではなかった。そのことだけで天野先生の研究室を思い出す。こうやってイメージが重なるのはアルコールのせいだ。目の前にいてわたしの体をつかんでいるのは確かに小泉くんなのに、いない人のことばかりを考える。

わたしはさみしさをぶつけるようにして、小泉くんの意外に引き締まった筋肉質の体にしがみついた。

小泉くんがぐったりしてからも、裸のままで抱き合っていた。ようやく効き始めたエアコンの風が届かない、体の重なった部分から汗が流れて横腹を伝い落ちる。さみしくて抱き合ったのに、終わってみるとさみしさは余計に深まった。わたしはどうしても離れることができなかった。

突然、小泉くんが、ははは、と笑った。

「どうしたの？」

驚いてわたしが聞くと、彼は少しだけ体を持ち上げて、わたしの頬を両手で挟んだ。

「大好きな天野先生のお気に入りを、抱いてしまった」

そうしてふいに小泉くんの口から出た、天野先生、という言葉をわたしは自分の口の中で呟いてみる。

ここにいない天野先生。日本から遠いところにいる天野先生。蜘蛛の巣でのスタッフ会議でわたしが何を言われたか知らない天野先生。まだ昼のロンドンで、自分が中心に立って公演の準備をしている精悍な顔つきの天野先生。

センテンスはどんどん長くなる。

「小泉くん、すごく好き」

彼は静かに、わたしの髪を撫でてくれた。

ヤングポテト・セカンドフライ２（前書き）

ところで書き損ねましたが、この作品は志村つるぎと、ある人物とのリレー小説です。

ヤングポテト・セカンドフライ2

ヤングポテト・セカンドフライ2

「君が噂のイモ女か。普通に可愛いじゃん」
科楽部の部室を訪れたはる子に対して初めは愛想よく対応してくれていた大泉と名乗る男であったが、はる子が自らの名前と科楽部に入部したい旨を伝えると、この筋肉男はガラリと態度を変えた。
「ジャックさんから話は聞いてる。俺は三年生の大泉。で、君はジャックさんに何されて入部させられることになったのよ？」
ある種の親近感を込めて大泉は聞いてくる。ああ、この男は別に嫌味な人間というわけではなく、ただ思った事を口にしちゃう人なんだろうな。筋肉で思考する人間に細やかな気遣いを求める方が馬鹿なのだ。はる子はそう考えながら、まざりっ気無し純度１００％のフェイクスマイルを顔面に貼り付けて答えた。
「新歓コンパの後で彼に犯されまして」
それまで奥の机に座ってこちらに見向きもしなかった天然パーマの男が目を丸くしてはる子を見ている。
「ハハハ！　おい、聞いたか菅山！」
体を仰け反らせ、手を上げて笑う大泉に菅山と呼ばれた男が立ち上がり、はる子達の方にやってくる。大泉よりも頭一つ小さい。はる子と同じくらいの高さの目線はいやらしさを帯びて鈍く光っている。それにしても、ふん。旧体然とした理系童貞男子め。はる子は挑戦的な目付きで菅山を見つめ返してやった。
「ああ、今年の一年生は面白そうだね。俺は三年生の菅山。よろしく、はる子。ちなみに科楽部の活動内容はどれくらい知ってる？」
はる子、か。その気安い呼び名に何となく粘つくモノを感じながらも、それを表に出すことなくはる子は簡潔に答える。
「四方の先端科技大、十二の次端科技大、そして民間企業数十社に

よって競われるPテックに出場し、科技大臣賞を獲ること」
「うん。模範的な回答、ありがとう、はる子。でもそれは表の顔なんだ」
含みのある顔から相変わらずいやらしい視線をはる子に飛ばしながら菅山は話を続ける。
「ジャックさんが設立した科楽部は3年連続で賞を獲っている。そしてこの実績があるからこそ科楽部は実験施設や資金を優先的に使えたり、結構自由に遊べてるんだ」
「まあ、早い話、Pテック優勝はただの免罪符さ。科楽部はジャックさんが思いついたことを好き放題やるために存在する部活だ」
幾分自嘲気味に大泉が口をはさむ。
「とは言っても、あの人と一緒にいると暇しないしな、ハハハ！なあ、菅山？」
「ああ、そうだな。まあ、ウチはそんな感じの部活さ。だから、君がジャックさんに犯されたと言っても、あんまり驚いたりしないよ。真偽のほどは別にしてね、はる子」
横槍を入れた大泉に菅山が一瞬だけ冷ややかな視線を投げつけたのをはる子は見逃さなかった。ふん。先ほど目を丸くしてたのも知ってるのよ、このイモ野郎。ジャック伯爵と比べたら、やっぱりこの二人は男爵止まりね。「無神経スキャット筋肉」と「サイエンティフィック粘着視線」と呼んであげるわ、お二人さん。はる子は笑顔のままハイと答えた。

はる子が科楽部に入部していくつか分かったことがある。ジャックがイギリスからの帰国子女であること。部員は部長のジャックを含め、大泉と菅山とはる子とマンチェスターに留学してしまった遅坂の五人しかいないこと。基本的に部員達はジャックの実験と称するワガママの手伝いをしていることなどだ。
先日はジャックの号令一過、リアル・ヴァーチャル問わず学内に存在するカレンダを全てピックアップさせられた。

「日本のゴールデンウィークって名前の割に安土ピーチマウンテン的絢爛豪華な金ピカチュウ不足だよねぇ。でもリキッドじゃなくソリッドのリアルゴールドはソー高価！　だからカレンダ上だけでも金ビッカージュウ！」

そう言ってジャックはヴァーチャルのカレンダの黄金週間にあたる日付を全て金文字にリライトした。スゴイ。強制上書プログラム。

「リアルのカレンダはどうするんすか？」

大泉がジャックに聞く。

「ハイ、これ。業者に発注してたのがさっき届いたんだよね～。ギャハハ！」

そう言ってジャックは大泉にシールの束を渡す。黄金週間にあたる日付だけが金文字で印刷されたものだ。ご丁寧に大中小の三サイズが用意されている。こうしてはる子達三人は深夜の学内を駆け巡ることになった。スゴイ。アナクロナンセンス。

ゴールデンウィークの黄金の輝きが過去のものになってしまったある日。ジャックは部室に入ってくるなり、中指を立ててファックサインを出しながら、唐突に口を開いた。

「部長やりたい人、この指とーまれ！」

はる子も大泉も菅山もキョトンとしている。

「ドクターの研究に注力しなさいってあんぐりアングリー杉山先生。だから僕は裏方に回って科楽部会長になりまーす。部長サン、大募集。来たれヤングマンウーマンリブ！」

三人が同時に思った。部長になればやりたい放題じゃないか。大泉と菅山は思った。はる子は一年生だから論外だろう。大泉は思った。菅山みたいな内向的な奴は部長には向かないだろう。菅山は思った。大泉みたいな馬鹿筋肉は部長に相応しくない。そしてはる子は思った。一年生のあたしが三年生を差し置いて部長になるのはさぞ痛快だろう。男爵イモ共にあたしが負けるはずない。何年生かだなんて関係ない。ジャックに認められさえすればいいのだ。それに

しても、やれやれ、この下品な指に停まるのは気が乗らないが仕方ない。はる子は手を伸ばして一番に言った。
「あたし、部長やります！」
「はい、はる子ちゃん、一番槍をフ～リフリ、ファーストシェイクスピア！」
ジャックの笑顔と突き出した中指のいやらしさはいつも通り変わらない。しかしそれに驚き慌てたのは大泉と菅山だった。
「いや、俺が、いやいや、おれ俺オレオ」
二人同時に同じようなことを口走ってジャックの中指に手を伸ばす。ジャックの中指を守るように絡みつくはる子の手。じんわりとした温もりと落ち着いた湿り気。ほわ。はる子の手に荒々しく重なる大泉と菅山の手。潮が引いたような冷たさと焦燥に駆られた湿り気。べちゃ。気持ち悪い。はる子は三つの手に触れてそう思った。

「オ～ウ。恋のデルタフォース関係。君たちアルファルファとブラブラボーボーとチャリチャーリ。そうなると弱肉強食、富国強兵、産めよ増やせよってなもんで、殺し合いをしてもらいマスロワイヤル！　キャハハ！」
ジャックの言葉に菅山が過敏に反応する。
「ジャックさん、はる子は一年生なんですよ？　部長は俺たち二人から選ぶべき…」
「何年生かは関係ない。菅山、僕がやると言ったらやるんだ。わかったな？」
ジャックの流暢な日本語が三人を絶対零度の世界へと一瞬で叩き落とす。黙ってうなずく菅山。ジャック、チョット、カッコイイ。不覚にもはる子はそう感じてしまった。
「えへへ。それじゃあみんなお待ちかねの部長選出ルールをペロペーロ説明タイム！　まず殺し合いというのはウソでーす。僕ってウルフボーイ！　キャハ。まずは隣りの研究室に移動しまーす」
ジャックに引率されて三人は杉山超進教授の研究室へ移動する。

学生と研究員の机、未だにオフラインペーパを保管するための本棚、オールスタンディングで会議をするための楕円テーブルとプロジェクタとスクリーン。全てがソリッドでマットな感じ。ジャックの足は研究室のさらなる深部へと三人を誘う。ジャック・ザ・パイドパイパー。三人は黙ってジャックの笛の音に従い歩を進める。二つの扉を抜け巨大な円柱の槽がある部屋へたどり着くと笛吹き悪魔はその足を止めた。

「はい。お待たせチルドレン。これがキョウコング級ピコプラント槽です。君たちはこの中で素粒子レベルまでデロデロメルトマスカワ〜ンしてもらいまーす。」

「え。それってもしかして、この前、猫で予備実験をやったアレですか」

何故かジャックのたくらみに関してだけは勘の働く大泉が口を開いた。

「ああ、やっぱりあれは俺たちを入れるための予備実験だったんですか。何となく嫌な予感はしてたんだ」

大泉の言葉を受けて菅山も声を上げた。はる子一人だけがわからない。ピコプラント槽でメルト？　猫？　予備実験？　そんなはる子を見てジャックが長い説明を始める。

「まず三人はピコプラント槽第一層に元気よくハイハイ入ってもらいまーす。そこで君たちの脳はリアルタイム三次元液浸グレーティングスキャンされちゃイヤーン！　そのスキャニングデータから電子的に君たちの脳を第二層でカチャカチャリストラクチャ。そんでもって君たちのネイキッドエレクトロニックブレインはドロドロに溶け合って第三層で奇跡の邂逅を果たすワケ。モチロン、第三層での君たちのやり取りは第一層のリアルブレインに記憶データとしてフィードバックされピコピコピー。ふうふう、それにしても、ヒュ〜、ロマンチックが止まらないね〜！」

何をするのかはわかったが、その結果がどうなるのかがはる子にはイマイチわからない。はる子と菅山は眉間に皺を寄せる。菅山は

一人でブツブツと何かをつぶやいたかと思うと、得心がいったのか急にニヤリとして黙ってしまった。一方のはる子はそんな菅山の素振りもあって眉間の皺をますます深くする。気持ち悪い。あたしがわからないという事実、そしてサイエンティフィック粘着視線の挙動不審っぷり。気持ち悪い。大泉はそんなはる子の心情など知るはずも無かったが、彼女の眉間の皺の深さが日本海溝に並ぼうかというタイミングで補足説明を始めてくれた。

「簡単に言うとだな、思ったり考えたりしたことが直接相手に伝わって、隠し事が一切出来ない世界に俺たちは放り込まれるってワケ。腹を割ってというより、頭蓋骨を割ってという感じだな。ストレートにモノを言えない典型的な日本人の俺にはキツイよ。ハァ」

ズケズケと思ったことを言ってしまう大泉のこの発言で、はる子はクスリと笑ってしまった。ピコプラント槽で行われる部長選出戦へのプレッシャーが、大泉の言葉で少しだけ和らぐ。大泉が作ってくれた余裕がはる子の心に生来の負けん気を思い出させてくれた。あたしは誰にも負けない。それにしても、大泉先輩、ハハハ。この男も侯爵イモくらいには考えてやろう。

蜘蛛の巣3

蜘蛛の巣3

その日は一人になりたくなかったので、小泉くんの部屋に泊まった。わたしたちは何度か抱き合って、あまり眠らないまま朝を迎えた。

カーテンを通して部屋に光が差し込んでくると、知らない部屋で一晩を明かした妙な違和感が、まぶたの裏から全身に広がった。

「ありがとう、そろそろ帰るね」

枕に顔を押し付けて寝ている小泉くんの耳に囁きながら、洋服を身に着ける。彼はハッと起き上がって、まだ焦点の合わない目でわたしを見た。

「え、おれ朝食作りますよ。それにまだ七時じゃないですか」

「朝イチから制作実践の授業入ってんの。その前に一度家に帰ってシャワー浴びたいし」

すっかり服を着てから、何も着ていない小泉くんを抱きしめた。Tシャツを通して彼の体温を感じると、急にとても恥ずかしくなった。

「じゃ、またね」

「ほんとにまた来てよ」

小泉くんが言った。体を離すとき、それまで意識することがなかった強い汗の臭いがした。

帰宅してシャワーを浴びると、昨日のことがすっかり嘘になった。トーストを焼いてコーヒーをいれる。わたしの生活。わたしの部屋。いつもと変わらない。

天野先生の脚本を読みながら、トーストを食べた。少し焦がした耳がカリカリと音を立てる。次回のスタッフ会議は三日後に開こう。それまでに大体のプランを上げておくよう、研究室のホワイトボー

ドに書かなければ。舞台監督班は、本番までのスケジュールをそれまでに作成しておかないと。
わたしは脚本を読みながら、そのシーンに必要な作業を書き出していった。それが終わると、家を出なければいけない時間だった。
歩きながら、小泉くんと菅原くんにメールを打つ。今日の五時から舞監ミーティング。第三研究室にて。それだけの内容で送信して、授業に急いだ。
夕方になりミーティングのため第三研究室に入ると、すでに菅原くんが座っていた。
菅原くんはわたしを見ると、生真面目そうに立ち上がって挨拶をした。
「いいのよ、座って座って」
わたしは慌てて彼の隣に座った。わたしが座らないと、菅原くんは座りそうにない。
「体育会じゃないんだし、気楽にやってよ」
笑いながら言うと、すみません、と恥ずかしそうにうつむいて呟いた。
「脚本読んだ？」
菅原くんはぎこちなくうなずいて、自分の脚本を鞄から出した。そこにはびっしり、几帳面な文字で書き込みがしてあった。
「すごい。よく読み込んできたね。天野先生が見たら喜ぶよ」
天野先生、と言うと、いつもこの隣の部屋で机の上のパソコンとにらめっこをしているはずの天野先生が今はいない、ということをまた思い出した。あちこちに不在はある。わたしは長く離れているのに慣れていない。
菅原くんを見ると、所在無さげにシャープペンシルを指の上で回して、自分の書き込みでいっぱいの脚本を読んでいた。
わたしは椅子を近づけた。
「小泉くんは制作志望って言ってたっけ。菅原くんは？」
「脚本演出、です」

ちらりとわたしを見て、また脚本に目を落とした。脚本に目を落としても、今度は読んでいないのはすぐにわかった。
「どんなの書いてるの？」
わたしはさらに近づく。乾き切っていない洗濯物のにおいが、かすかにした。
「いろいろ、書いてます。まだ先生に出したことないけど」
今度は目を落としたままで答える。
「読ませてよ。わたしに」
耳元で言ったとき、ドアノブの回る音がした。菅原くんのほうが、とっさに離れた。
「おはようございます、おれが最後でしたか」
小泉くんが入ってきて、わたしにだけ会釈した。目が何事かを語りかける。わたしはうなずいてみせた。
「本番までのプラン、立てちゃいましょう」
立ち上がって小泉くんを菅原くんの隣に座らせた。わたしは二人の向かいに座る。そうしてミーティングを始めた。
天野先生が帰ってくるまでに、わたしは小泉くんの部屋に三度泊まった。
「天野先生の書くものは時代も国も登場人物もバラバラだけど、どれも現代に生きていることの違和感、みたいなものがテーマだと感じるんです。春菜さんはどう思いますか？」
小泉くんは熱に浮かされたように天野先生のことを話す。わたしはテーマなんて考えたことがない。天野先生の頭から出てきた言葉だというだけで、ぼうっとしてしまうだけだ。
だけどそんなことは言えなくて、小泉くんに合わせるように適当な言葉を並べて返事をしてしまう。小泉くんは満足したようにうなずき、その満足した体でわたしを抱いた。
菅原くんからのメールは、最初は舞台監督の仕事についてだった。些細な質問が一日に三度ほど来た。面倒だと思いながらもきちんと返信していると、そのうち内容が私生活の報告みたいになってきた。

朝から健康のためにジョギングすることにしました、などという他愛もないメールを読んでいると、生真面目な彼の表情を思い出して笑ってしまった。一週間も経たないうちに、二人で会いたい、というメールに変わった。わたしは、もちろんいいよ、と返事した。
菅原くんと二人で会う前に、天野先生から電話があった。先生の帰国する前の日で、朝の五時だった。わたしは寝ぼけて、小泉くんの部屋にいると勘違いし、携帯をつかんで廊下に飛び出した。
「春菜、明日帰るから、空港まで迎えに来い」
第一声がそれだった。わたしは自分のマンションにいることに気付いて、部屋に戻りながら言った。
「なんで今まで電話くれなかったんですか。公演どうだったんですか。ひどいじゃないですか、ほったらかしにして」
「来るのか来ないのかどっちだ」
「お客さんいっぱい入ったんですか。わたしまた舞監ですよ。なんかみんな、ただのスタッフなのにアーティスト気取りでわたしのことバカにして、すごく寂しかったんだから」
「で、来るんだろ？　夕方五時な」
「五時って、今日のこと？　明日？」
「明日だって言ったろ。何度も聞くなって」
「そっちはまだ昨日でしょ？　明日って今日？」
「わけのわからんことを言うな。おまえの明日だ。フライト時間考えろ」
いつも通り、自分の都合だけで勝手なことを言うけれど、声が聞けてとても嬉しかった。
「じゃあ、切るけど、帰ったら空港近くのホテルに泊まろう。レストラン予約したから。またな。楽しみにしてる」
天野先生はそう言って、電話を切った。ちゃんと優しい言葉も忘れない。わたしはもう眠れなくて、朝から洗濯をした。
天野先生が帰って来ると、蜘蛛の巣も活気づいた。天野先生は帰国早々スタッフ会議に出て、各スタッフの動きを把握し、指示を出

した。スタッフは天野先生がまとめている。たしかに舞台監督の仕事はなくなった。
会議のあと、小泉くんからメールが来た。
？？今日来ない？
天野先生が部屋に来ることになっていた。わたしはもちろん、口実をつけて断った。
入れ替わりに菅原くんからメールが来た。
？？いつ会えますか？
こちらも適当な返事をしてお茶を濁すしかない。
夜になると約束通り、天野先生が来た。用意していたパスタを二人で食べたあと、わたしは先にシャワーを浴びた。
スポンジで体を洗っていると、天野先生がいなかった時間を思い出すほうが難しかった。空港で天野先生の姿を見たとたん、いなかったときに感じていたさみしさが体の奥にすっ、と沈殿してしまったのだ。もう思い出すこともなく、排出されていくのかもしれない。
鼻歌まじりでバスルームから出ると、天野先生は立って待っていた。入れ替わりでシャワーを浴びるつもりだろうと思い、ドアを開けたままにしていると、「閉めろ、湯気が出る」と不機嫌な声で言われた。
「何を怒ってるの？」
わたしがそれでも能天気にたずねると、いきなり視界が真っ暗になった。自分がどちらを向いているのかわからなくて手を伸ばすと、テーブルの角にたどり着いた。
それから、頬に痛みがやってきた。
わたし、殴られたんだ。
そう気付いたとき、天野先生はわたしの太ももを蹴り付けていた。
「なに、なに、やめて」
太ももに断続的な痛みを感じる。頬が焼けているような気がして、わたしは両手で顔を覆った。
ただ怖かった。何が起こっているのかさっぱりわからない。太も

もへの攻撃がやんでも、やはり痛みは残っていた。自分の周りは暗いままで、ぼんやりと輪郭の見える、目の前にあるものが一体何なのか、自分の体がどうなっているのか、知る術がない。

そうやって恐怖を感じていた時間が一瞬だったのか、長い時間だったのかはわからない。ともかく突然視界に色が戻って、やっと自分が倒れていることに気付いた。目の前にあるのは、天野先生の足だった。

見上げると、わたしの携帯電話を握った天野先生が、仁王立ちでわたしを見ていた。

「小泉と菅原。一年のあいつらか。人が日本にいないと思って、ふざけんな」

頭の上に、携帯電話が降ってきた。すごい音を立てて床に落ちたそれは折り畳む箇所が不自然に折れていて、もう使えないと一目でわかった。

わたしに何を言わせる暇も与えず、天野先生は出て行った。わたしは目を閉じた。世界がぐるぐる回り始めた。

ヤングポテト・セカンドフライ3

ヤングポテト・セカンドフライ3

台詞前の役名については以下のように略す。はる子→「は」、大泉→「泉」、菅山→「菅」

電脳第二層。暗闇の中でばらばらに眠る三人。ステージ中央やや右寄りの菅山へスポットライト。菅山、目をこすりながら立ち上がって周囲を見渡す。

菅「んん。誰もいない。そうか、まだ電脳第二層か。実際の体は薬品漬けで動いてないはずだから、今の身体感覚は擬似信号だな。ふん、さすが、俺。こう言うことに気付ける人間にこそ部長は相応しいんだ。とは言っても部長職そのものはどうでもいい。俺は『豆腐の角爆弾』を実現できればそれでいい。成層圏から豆腐を落下させて無知蒙昧の輩どもの頭に打ち付けてやるのだ。科学技術の恩恵を受けながら、非科学を妄信する心臓主義者共に。落下時の空気抵抗からの豆腐保護シールド、アクティブホーミング、インパクト直前のシールド解除、そして純粋な豆腐の位置エネルギーだけで奴等の脳を打ち砕く。雨豆腐、最高の天気じゃないか。でも、これを現実のものにするには部長の椅子が必須だ。それにしても、あの馬鹿筋肉と出しゃばり女め。大泉は『豆腐の角爆弾』実験の名誉ある被験者一号にしてやるか。クク。はる子はそうだな、俺の部長就任祝いに花を添える意味も込めて、マジで犯してやる」

菅山、立ったまま、暗転。ステージ中央やや左寄りの大泉へスポットライト。大泉、大きな欠伸をしながら立ち上がり、右腕で力こぶを作ってマッスルポージング。

泉「ふわあ。どこだここ。うんっ、むっ、とりあえず俺の上腕二頭筋は絶好調。そして俺の敬愛するジャックさんのすることに間違いはないしな。うん、今はジャックさんを信じてただ待てばいい。そう、自らの筋肉しか信ずるものがなかった俺に、初めて筋肉以外にも信ずるに足るものがあるということを教えてくれた人。あの天衣無縫のアフロヘア、天真爛漫な発言、天壌無窮な脳ミソ。俺はジャックさんになりたい。愛するジャックさんに認められ、彼と等しい存在になり、彼と一つになりたい。だからその第一歩として俺はこの筋肉で部長になる」

大泉、ポージングしたまま、暗転。ステージ中央のはる子へスポットライト。はる子、上半身だけ起こしてため息をつく。

は「それにしても、ふう。あたしが全く知らないこの世界を、男爵イモと侯爵イモの二人がある程度知ってるというのが気に喰わないわ。何としても二人を出し抜いて、あたしが一番優秀だってことを認めさせてやる。あたしはあの二人とは違う。あたしは凡人じゃない。だからあたしは勝たなければいけない。あたしが負け犬共に興味を持てないように、負け犬になったあたしを見てくれる人なんて誰もいない。だからあたしは今日まで勝ち続けてきたし、明日からも負けられない。あたしは部長になるために勝つんじゃない。負けないために勝つんだ」

はる子、立ち上がり、暗転。

電脳第三層へシフト。先ほどの格好のままの三人にそれぞれスポットライト。一同に会する三人、お互いの顔を見て様子を伺う。

は「アハハ。大泉先輩、何で今ここでマッスルポージングなの？ ホント、筋肉の人って訳わかんないとこありますね」

泉「ああ？　てめえは筋肉を馬鹿にすんのか？　いいか、男の筋肉

は愛する者を守り、愛する者を抱くためにあるんだ。ジャックさんじゃねえけど、てめえ、犯っちまうぞ！　あ、別にてめえを愛してるわけじゃねえけどだな…」
菅「ククク。大泉の筋肉については俺もはる子と同意見だ。君はもっと頭を鍛えた方がいい。すでに脳が筋肉になっていなければの話だけどな。ハハハ」
泉「カッ！　菅山、貴様！」
は「大泉先輩、ごめんなさい！　あたし、そういうつもりで言ったわけじゃないの。ああ、思ったことが伝わってしまうって、こういうことなのね。あたしは筋肉を馬鹿にしてるわけではなく、その格好が面白くて、冗談っぽくさっきみたいな言い回しをしてしまっただけなの。何だか思ったことのニュアンス全てが伝わるわけではなく、頭に浮かんだ言葉が字面どおり伝達してしまう感じ。ホント、誤解を招くような言い方でごめんなさい！」
泉「う、まあ、そういうことであれば、ゆ、許してやるよ。俺も言い過ぎたな」
は「大泉先輩、ありがとう。そして、菅山先輩。あなたも大泉先輩に謝罪して。あなたの発言はあたしのそれと違って明らかに大泉先輩を侮蔑してた」
菅「ふん。イヤだね。俺は自分の発言に自信と責任をもって生きているつもりだ」
は「ふう。現実世界じゃ大泉先輩の筋肉が怖くてそんなこと絶対言えないのにね。ならあたしも言ってあげる。アンタ、童貞でしょ？　アンタにはる子って呼ばれんの、気持ち悪いんだけど」
菅「てっ、このアマ、せ、先輩に向かっ」
泉「ハハ！　はる子、いや、はる子ちゃん、よく言った！　おかげで頭を冷やせたぜ。そして菅山、てめえの言った事、許しはしないが今は忘れてやる。だからまずは答えな。ここは第三層か？」
菅「な、後輩に、舐められ、くっ、そうだ、三人が揃っている以上、ここは第三層だ。おい、はる子、童貞で何が悪い、このアバズレめ

！　成績優秀者しかスカウトされない科楽部にてめえみたいな出しゃばり女が入れたのも、大方ジャックさんに大股開きで迫ったからだろうが！」
は「ハッ。ジャックさん曰く、あたしは本年度首席らしいよ。残念だったな、童貞！」
泉「止めろ、二人とも。第三層に来ておそらく実時間で数分もたってない。それなのにこんな状態ではジャックさんに笑われるぞ。菅山、いつもクレバーなお前らしくない。そしてはる子ちゃん、お前も少し落ち着け。いいか、俺達は今まさにジャックさんにテストされているんだ」
は「ふん。そうね。菅山先輩が冷静な話し合いのテーブルに座ってくれるなら、あたしも落ち着けるわ」
菅「てめ、どこまでコケに、グッ、いいだろう、大人の会話をしようじゃないか」
泉「ＯＫ、二人とも落ち着いてくれたな。では俺から一つ提案がある。ここは思ったことがすぐに伝わってしまう世界だ。だから自分が感情的になりそうな時、すぐに別のことを考えるよう関連付けるというのはどうだ？　そうすれば皆マッスルクーリング&トークできるだろ」
菅「ふん。マッスルは置いとくとしてもだ。そういうことであれば、短く抽象的な単語と関連付けした方がいい。そう、例えば感情的になりそうな時、すぐ『チッ』という単語を思い浮かべたりな」
は「へえ。何だか、意外に、うん。先輩達、ちょっと見直した」
菅「チッチッ、それは褒めてんのか？　まあいい。おい、大泉、さっきジャックさんが見てるって言ったけどな、あの人は部長選出基準さえ言ってないんだ。だからまず初めにそこを考えるべきだな」
は「ああ！　全然気付かなかった。悔しい。チッ」
泉「チッチッ、いつものお前らしくなってきたじゃないか、菅山。ふん。ジャックさんが基準を言わなかったってことは、何か意味がある。そうだな、あの人のことだ。彼の興味を引き、面白がらせる

ことができた奴が選ばれたりしそうだな」
菅「ククク。大好きなジャックさんのことなら何でも知ってるって素振りだな」
泉「チッチッ、菅山、それくらいにしとけよ」
は「ねえ、思考との関連付けって『チッ』という言葉以外でもできるよね」
泉「慣れれば可能だろ。急にどうした？」
は「うん、『チッ』って言うのはネガ思考をスキップさせる言葉だよね。逆に無意味なテキストを発言に交えると、それはあたし達の思考会話のウェイトになる。でもその無意味な一文をあたし達は無視できるよう関連付けするの」
菅「ハハ！　お前、面白いな。我々は無視できるけど、ピコプラントの制御ユニットはその思考ノイズを一字一句拾ってフルモニタすることになるだろな」
泉「そうなると、ピコプラント内をモニタ越しでしか確認できないジャックさんも思考ノイズを無視できない、か」
は「うん。ダミーテキストを関連付けした思考ノイズにオリジナルの略語なんかも織り交ぜた高速思考言語で会話するの。それをオーバー脳クロック状態で続けられれば、あたし達とジャックさんの間でディレイが発生しないかな」
菅「プラントコントロールＣＰＵの処理速度よりも脳クロックアップ状態での高速思考言語会話の情報量がでかければ、俺達とジャックさんの間で遅延が発生する可能性は十分にあるだろうな」
泉「ハハ。なるほど。そいつは面白い。遅延が発生すればジャックさんの性格上、こちら側にダイブする可能性は高そうだ」
は「うん。高みの見物を決め込む彼をあたし達と同じフィールドに引っ張り出せたら万々歳だし、少なくとも彼の注意を引けるんじゃないかなって。…でもね、このプランには一つ問題があるの」
泉「何だ？　問題って」
は「この作戦を立案したのはあたしだし、この作戦を実行してもジ

ャックさんへのアピールという意味ではあたしのポイントになってしまう。チッ。けどこの作戦はあたし一人よりも皆でやった方が情報量も多くなって効果的だし、チッ、本当は一人でやれたらいいんだけど、チッチッ、ええと、その、チッチッチッ」
菅「ふん。アイディアは面白いし、ジャックさんを招待するのに反対する理由もない。俺はお前のことが好きではないが、チッチッ、感情を優先させるほど愚かではないつもりだ。彼を引きずり込むまでは協力しよう。ふん。それからでも俺はいくらでもアピールできるしな」
泉「ハハ！　菅山、お前を少し見直したよ。俺もはる子ちゃんのプランに賛成だ。よし、共闘作戦・プロジェクトマッスルトークだな。ジャックさんをこちらの世界に招待するまでは俺も協力するぜ」
は「チッチッチッ、ええと、そのプロジェクト名はどうかと思うけど、チッチッチッ、あの、協力、ありがとう」

暗転。はる子、ステージ中央で少し前進して座る。大泉と菅山だけにスポットライト。二人、キョロキョロと周囲を見渡す。ステージ中央、さきほどまではる子がいた場所にスポットライト。アフロヘアを被った男性マネキン登場。アフロマネキンは抑揚の無いマシンボイスのように発声する。なお、アフロマネキンの台詞前の役名は「J」とする。

J「大泉くん、電脳世界でみんなをまとめる姿、見せてもらいました。中々立派でしたよ。菅山くんは冷静な観察力と効果的な追加意見でアピールしていましたね。あの状況で良くできていたと思います。二人とも部長になる資格は十分にあると感じました。だから部長はやっぱり三年生の君たち二人から選ぼうと思います。そうなると、この実験、半分は終了したようなものです。そこで君たち二人から部長を選ぶ前に、私としては新入部員の春子がどういう人間かもう少し見てみたい。うん。短刀を直輸入に言いましょう。メイド

インＵＫ。今のところ三人で共闘することになっているようですが、二人は彼女を裏切って下さい。これが二人から部長を選ぶ絶対条件です」
菅「ああ、やっぱり介入してきましたね、ジャックさん。はる子のアイディアを試す間もなかったか。ええと、はる子を裏切るか否かの回答をする前にジャックさんのその姿について一つ教えて下さい」
Ｊ「いいですよ。質問に答えましょう」
菅「我々三人を電脳世界に送り込むだけでピコプラント制御ＣＰＵには相当の負荷がかかっていたんですか？　ジャックさんの電脳世界でのアイコンを動かないマネキン姿とマシンボイスにして、ＣＰＵへの負荷を軽くしてやらないといといけないくらいに」
Ｊ「今回の実験ではピコプラント以外にもスーパーノヴァ級ナノコンピューティングシステム四台の使用申請を出してます。あのオクトプロセッシングユニット搭載マシンをサポートにあてて君たちの生体情報を処理してるんだ。頭の良い君ならもうわかるだろう？」
菅「それだけのパワーマシンを並べられたら共闘作戦を展開しても情報遅延の発生は無理か。ええと、じゃあその格好もいつものおふざけってとこですか」
Ｊ「うん。まあ、そんなところ」
菅「わかりました。そういうことであればはる子の作戦に固執する意味は無い。彼女を裏切ります。部長になりたいしな」
Ｊ「大泉くん、君はどうしますか？」
泉「いつものジャックさんの話し方じゃないんですね。『短刀を直輸入に』ってとこ以外は何だか真剣になったときの流暢な日本語を話すジャックさんに近い感じもします。チッ、ええと、俺も一つ質問が。その話し方は隠し事のできないこの世界だからこそなんですか？」
Ｊ「ふむ。さすがに私を良く見ているね。そう、この話し方が私の思考言語です」
泉「何だか、ちょっと、納得が、チッチッ。ああ、すいません。で

も、菅山の言う通りだ。はる子には悪いが俺も部長にならなきゃいけないしな。それが条件なら俺も彼女を裏切ります」
J「うん。二人とも賢明な判断をしてくれてありがとう。そして君たちは春子に対して気に病む必要はないよ。二年経てば自動的に彼女が部長になるわけだからね。だってここは年功序列の国だろう？」
泉「ジャック、さん？」
J「ハハハ、君達、馬鹿だね。ドロップ&フラッシュアウト。バイバイシーユー」

暗転。大泉と菅山、舞台から去る。残ったはる子とアフロマネキンにスポットライト。はる子、微動だにせずうつむいて座ったまま。

J「と、言うわけです、春子。見て聞いての通り、君は裏切られました。せっかく勇気を振り絞って協力を求めたのに残念だったね。我々が社会性動物である以上、どんなに個人が優秀であってもそこには限界があります。そう、個人ではシステムには勝てない。科学技術の発展に伴いハイパーコンプレックス化が進んだ今となっては特に、ね。だから優秀なインディビデュアリストの君が協力を求めた姿勢は評価できる。でもね、彼らは最終的に個人の利益を優先させた。君はやっぱり一人なんだ。そして一人では私という巨大なシステムに勝つことは絶対にできない。まあ、私がすでにここにいる以上、君の作戦を続行する意味も無いんだけど、一人でまだ何か他にできることがあるかい？　それともこのままテストを終了するかい？」
は「じゃっくさあん、あたし、どうしよう」
J「じゃあ、もう少し君を壊してあげよう」

はる子、うつむいたまま立ち上がる。アフロマネキンがはる子を後ろから包むように抱く。はる子、アフロマネキンの腕から滑り落ちるように崩れ落ちる。暗転。

蜘蛛の巣４

蜘蛛の巣４

気がつくと、明るい光がカーテン越しに差し込んでいた。時計を見ると八時だった。

殴られて昏倒した。わたしが寝ていたのははたして一晩だけだったのか、それとも脳に考えられないような傷を負って、もっと長い間寝ていたのか、判断できなかった。

そうだ、携帯電話に日付が出る。そう思ったが、自分の横に転がる携帯電話はめちゃくちゃに壊れていた。

それを確認しているとき、急激に頬に痛みが襲ってきた。痛みは頬から頭部全体に広がり、頭を動かすのがつらい。試しに口を開けてみると、経験したことのない激痛で目がくらんだ。

骨だ、骨が折れてるんだ。

そっと触れてもそれだけで痛かったので、わたしは確信した。そしたら太ももが震え出した。こわい。すごくこわい。

恐怖の対象は天野先生だろう。頬の骨が折れるほど女を殴りつけておいて、そのまま帰宅して様子も見に来ない。事実わたしは気付くまで、少なくとも十時間は経っているのだ。本当なら、すぐに救急車を呼ぶだろうと思う。

けれどわたしが震えているのは天野先生なんかに対してじゃなく「下手すると死んでたかもしれない」という、もっと動物的な理由なのかもしれない。ともかく、震えは太ももから全身に移った。

震えがおさまり出すと、今度は見た目がどうなっているのか気になり始めた。そっと触った感触では、変形しているようだった。よくドラマや映画で見る殴られた人は、目がつぶれてしまっている。あれは目の上を殴られたからなのか。それとも殴られたらみんな、あんなふうになるのだろうか。

天野先生、と思った。
わたしがおかしな顔になっても、天野先生はわたしの部屋に来てくれるのだろうか。
いや、わたしは混乱している。天野先生は小泉くんや菅原くんからのメールを見て、わたしを殴るほどに怒っていたじゃないか。もう、わたしがどんな顔をしていようと、愛想を尽かしてしまったのだ。戻ってくることはない。
そう思うと、胸の奥から泣きたい衝動が起こった。けれど嗚咽した拍子に頭が動いて、その痛みで涙は止まってしまった。痛い。痛いよう。だれか。
わたしは携帯電話を持ってみた。だれかにコールしたかった。一人では動くことすらできない。痛みは消えそうになかった。早く病院に行ったほうがいい。わかっていても、携帯電話は起動しなかった。
あまのせんせえ。
わたしは唇だけを動かした。
あまのせんせえ、かえってきて。
涙が壊れた頬を伝った。頭を揺らさずに泣く方法をわたしは会得した。すると涙はどんどん溢れて、胸のあたりにぽたぽた落ちた。
そこで初めて、自分がまだ何も身に付けていないことに気付いた。そうだ、シャワーから出てバスタオルを巻いた状態で、殴られたんだった。救急車を呼ぶにしても、服を着なくちゃ。
頭を動かさないようにして立ち、そっと動いてみた。なんとかなりそう。洋服ダンスから一番上に置いてあったTシャツとジーンズ、下着を取って、注意深く身に付けた。Tシャツに頭を通すとき、頬に生地が触れないように苦労したが、慣れれば頭を動かさずに移動するのは簡単だった。
よし、それじゃあトイレに行って、顔がどうなってるか鏡で見てみよう。
わたしはそろりそろりと歩いて、トイレに入った。用を足してか

ら小さい鏡に顔を映す。
ひどい有様だった。
殴られた左側の頬はこんもりと腫れ上がり、全体に青紫になっている。もちろん左目はほとんど開いていない。左頬から鼻との境界がなくなり、ひとつの大きな山があるだけだった。そこに涙のべたべたした跡が付き、てらてらと光っている。
長いあいだ鏡の中の自分を、ただじっと見つめた。
これはもう人間の顔ではない。そう思った。
こんな顔で、だれに助けを求められるというんだろう。天野先生はもちろん、ほかのだれだって、こんな顔の女に情を掛けてくれるわけがない。
そのとき、玄関のチャイムが鳴った。
だれだろう。天野先生？　心配して来てくれたの？　だとしても、この顔では会えるわけがない。
チャイムがもう一度鳴る。わたしは体を固くしたまま、トイレの中にいた。するとがちゃりとドアの開く音が聞こえた。ああ、天野先生が帰ったままだったから、鍵をかけていなかったんだ。
わたしはトイレのドアを閉め、鍵をかけた。
「春菜さん、小泉です。どうしたんですか、いるんでしょう？」
わたしはドアを握りしめた。絶対に会いたくない。こんな顔のわたしを見たら、小泉くんだって逃げていく。
「ここですね」
声がして、トイレのドアを引く強い力を感じた。鍵が閉まっているから開くことはない。けれどわたしはこわくてたまらなかった。
「帰って！」
大声を出すと頭に響いた。次の言葉を出すことができない。
「学校には来ないし、携帯は留守電になってるし、心配したんだから、開けてよ。どうしたっていうの」
小泉くんの声はほんとうに心配そうだった。だけどわたしは知ってる。わたしが昨日までの顔だったから、彼は心配してくれてるだ

けなんだ。
「いいから、帰って」
弱い声でそう言った。それしか言うことはない。
「天野先生が、春菜さんを舞監から下ろすって言ってたけど、関係あるの？　先生に聞いても、違う役職につける、って言うだけで、何が何だか」
舞台監督を下ろして違う役職につける？　何を考えてるんだろう。
どんどん、とドアが叩かれる。
「とにかく開けろよ。何が起こってるとしても、おれが力になるから。頼むから、開けてよ」
力になんかなりっこない。こんな顔で泣き腫らしたわたしを見て、助けてくれっこない。そんなくらい、わたしにだってわかる。
「嘘言わないで、帰って」
わたしの声はちゃんとドアの隙間から、小泉くんに届いた。彼はドアを叩く手を止めた。
「嘘？」
嘘じゃないか。力になんかなれないんだ。わたしの顔を見たら最後、逃げ帰るに決まってるのに、なんで口先ばっかりでうまいこと言うんだ。
「なんでおれが嘘なんか言わなきゃなんないんだよ」
ほら、そんなくらいで怒っちゃう。やっぱりわたしを助けてなんかくれない。
「おれは心の底から力になりたいと思ってるのに、何で嘘つき呼ばわりされるわけ？　顔ぐらい見せろよ。かわいくねえ」
そうよ、かわいくないのよ。かわいかったらすぐに甘えて、助けてもらえるのよ。
わたしは鏡を見た。鏡の中の女の顔は、醜く変形していた。
「だから帰ってよ」
小泉くんは黙っていた。そして、ドアから手を離す感触がした。
「帰るよ。わかったよ、もう。ほかに男がいるんだろ、どうせそん

なことなんだろ。おれと終わりたいだけなんだろ。だったらそう言えよな。勝手に隠れてろ」
大きな足音を立てて、小泉くんは出ていった。わたしはトイレのドアを開けて、部屋の真ん中に立ち尽くした。
一日経つと痛みが少し和らいだので、わたしはマスクと帽子で顔を隠して病院に行った。やはり骨が折れていた。いくつかの検査を受けて、異常がないとわかってから帰宅が許された。帰りに蜘蛛の巣に寄り、一階にある掲示板だけを見た。
「木津春菜　舞台監督→演出補」
演出補？　何のつもり？　演出にくっついて、それこそ演出の秘書みたいな仕事をするスタッフに、どうしてわたしを起用するの？
演出が出演するわけじゃない芝居に、演出補なんて必要ないじゃない？
天野先生に会いたい気持ちが起こったが、注意深く顔を隠したまま、家に帰った。
小泉くんと違い、菅原くんは家まで来ることがなかった。しょせんそんなものだ。たとえ心配しても、来る勇気はないんだ。
流動食を食べ、痛み止めの薬を飲んでいると、チャイムが鳴った。出る気はない。けれど誰が来たのか、気になった。
「春菜」
声は天野先生だった。ドアが開いた。合鍵。隠れる暇がなかった。
「ははは、学校に来ないんで予想はしてたけど、すごい顔だな」
「帰ってください」
言いながら、来てくれたことが嬉しかった。でも、顔を見られるのはどうしてもイヤだ。わたしは天野先生から顔を背け、手のひらで隠した。
「それはそうと、小泉は怒ってクラスでお前の悪口を言いまくってるぞ。閑職の演出補にされたのは、おれの直筆脚本売ってたからだってさ。ははは、売れるのかね、そんなもん。一体あいつに何したんだ？　菅原はそれを真に受けてるから、もうお前には関わらない

だろうしな。院生ほとんど信じちゃって、もうお前の信用ゼロ」
「その根も葉もない噂、どうせ天野先生が流したんでしょう？」
わたしは言いながら、悔しくて流れ出る涙をこらえるのに必死だった。天野先生はケロっとした声で答えた。
「そうだよ」
思わず、わたしは振り向いた。その醜い顔を天野先生に晒した。
「なんでそんなこと」
「それくらいのことで去っていくヤツのことなんか、もう考えるなよ。かわいそうに、お前は裏切られたんだ。ただの噂を信じるバカどもにな。やっぱりお前は一人なんだ。さあ、一人はつらいぞ。誰かと一緒でないと」
天野先生は腕を広げてみせた。わたしの顔を見ても、帰らない。この醜い顔を見ても。
わたしは天野先生をじっと見つめ返した。

ヤングポテト・セカンドフライ４

ヤングポテト・セカンドフライ４

倒れたままのはる子とアフロマネキンに再びスポットライト。アフロマネキン、倒れたはる子の頭を膝枕して優しくなでる。アフロマネキン、知的で温和な声で話し始める。

Ｊ「春子。今から君の脳髄の最深部まで犯（ジャック）してあげる。そう、ここは電脳第四層。抵抗してもいいけど、僕には君の脳を強制開放できる力があるってことを忘れないで。そしてできれば無理矢理はしたくない。だから、心と眼を、開いて」

は「あーうー」

Ｊ「うん、素直でよろしい。それではまず大泉くんと菅山くんについて。彼らは部長候補から外れてもらいました。残っている候補者は田中春子、君だけです」

は「あぶう？」

Ｊ「ふふ。君の脳内に僕がいるという感覚にまだ戸惑っているね。そのうち慣れてくるさ。まだ君は聞くだけでいい。話を続けよう。僕はね、第二層からずっと君たちをモニタしてたんだ。まず大泉くん。彼はね、ジャックという人間への個人崇拝に傾倒しすぎだ。思考停止、オリジナリティの欠如、よって失格。そして菅山くん。彼の方がまだマシだね。ただそれでも科学技術信仰に視野狭角気味に偏執的にオタク的に囚われ過ぎている。科学技術は万能だが、あくまでもそれは人間によって使役される道具に過ぎない。でも彼は利権目的だったかつての十字軍も恥じ入るくらいファンダメンタル科学技術クルセイダなんだね。そして本気で宗教戦争をしたいみたいだ。科学技術の奴隷に堕してしまった上に、やろうとしていることもつまらないので彼も失格」

は「じゃが、あだじぎゃ、ぶちょにゃの？」
Ｊ「うん、君が部長になれるかどうかはまだわからない。だからここからは君にも答えてもらうよ。まず君の『負け犬になったあたしを見てくれる人なんて誰もいない』という発言について。君はあれだけ大泉くんや菅山くんに協力要請するのをためらっていたインディビデュアリストなのに、自らの価値を他者による評価に求めてしまっている。それは何でだろうね」
は「わがらにゃい。わからにゃいの」
Ｊ「ふむ。聞き方を変えよう。君は首席入学するくらい優秀だ。そして優秀であることに自覚的だし、圧倒的大多数の優秀でない人間を見下している節があるように感じているんだけど、どうかな？」
は「うにゅ、あってみゃす」
Ｊ「ＯＫ、続けよう。君は優秀で選民思想的な優越感を心に抱いており、そこに君のアイデンティティがある。違うかな？」
は「…そう、です」
Ｊ「優越感というものは人という種を個体進化させるのに必要な感情だ。賢い奴は優越感を感じていたいからもっと勉強するしね。ただこれには比較対象が必要だ。だから変な言い方になるけど、絶対に相対評価になってしまう」
は「そう、です、あいてがひつようです」
Ｊ「うん、だいぶ慣れてきたね。これならしっかり君の話も聞けそうだ。ええと、相対評価の話。例えば君は大泉と菅山をイモ呼ばわりして見下していたね。そして自分は優秀で選ばれた人間であの二人とは違うと考えている」
は「…はい、そうです。あたしは、あの二人とは、ちがう」
Ｊ「うん、僕も君はあの二人とは違うと思うよ。だからこそ今ここで僕は君と二人で会話しているんだけど」
は「…あり、がとう、ございます」
Ｊ「いえいえ、どういたしまして。さて、そんな優秀で選ばれし者である君は常に勝ち負けを気にして、他者から評価されないといけ

ないと考えている。何故、そう思うんだろう」
は「負けぐみは必ようとされないから」
J「ちょっと大袈裟な言い方だけど、世界から必要とされなければいけないのは何でかな？」
は「それは、せ界から必要とされなければ、あたしが生きていられないから」
J「優秀で選ばれし人間になって始めて、君は世界から生きることを許されている、ってこと？」
は「そうです。例え選民思想的ゆうえつ感によって育まれたゆう秀さであったとしても、それこそがあたしの生存許可証なんです」
J「生存許可証、か。君は随分と生に対して消極的な考え方をするんだね。現実の君はとても積極的に生きているように感じていたけど」
は「あたしにしかできないこと。あたしにしかない能力。それによって世界にあたしを必要だと認めさせ、あたしは生きることを許されてる。だからあたしは勝ち続けないといけない」
J「ふむ。君の生に対する基本姿勢は『生かされている』という受動的な発想に基づいているみたいだね。生に対するパッシブシンキングから現実のアクティブアクションが生まれているというのが面白い。この一見するとアンビバレンツな生に対する考え方と行動はどこから出てきたんだろう」
は「それは、たぶん、怖い、から、です。あたしは死ぬのが怖い」
J「死への恐怖にこそ君のレゾン・デートルがあるってことかな？
だからこそ、君はいつ裏切られるかわからない仲間に頼るよりも、自分だけで身を処すことができるよう徹底的にインディビデュアリストたらんとしたわけなんだね。そしてそこにレゾン・デートルがある限り、自らの価値を相対評価に委ねなければならなかったわけだ」
は「怖い。あたしは誰からも必要とされず、お金も稼げず、ご飯も食べられなくなって、惨めに死ぬのが怖い。だから、生存許可証が

欲しい。ジャック、さん、あたし死にたくない。死ぬのが怖い」
J「大丈夫。君のレゾン・デートルが死への恐怖にあったとしても、僕には君が必要で、僕は君を裏切ったりしない。だから君は勝たなくても、生きていいんだ」
は「ジャック、さん？　あたしは死ぬのが怖くて、恐怖を感じているこの生が怖くて、だからあたしは誰かに許して欲しくて」
J「僕が、僕だけが、君の生を許す」
は「じゃっく、さん？　何であなたはあたしに優しくてくれるの？」
J「君が、必要、だから」
は「じゃっ、くさん？　あなたに勝てないあたしでも、何であなたは必要としてくれるの？」
J「君が、好き、だから」
は「じゃっ、く？　死にたくないから生きているだけのあたしに、何であなたは好きだと言ってくれるの？」
J「君を、愛して、しまったから」
は「あたしを、愛して、しまったから？」
J「春子、僕は、君を、愛してる」
は「ジャックが、あたしを、愛している？」
J「春k

　アフロマネキン、突然こと切れてはる子に覆いかぶさるように倒れる。はる子、顔を上げてアフロマネキンを覗き込む。

は「ジャック、さん？」
は「どこへ行ったの？」
は「…」
は「あたしはあなたを信じていいの？」
は「何で返事をしてくれないの？」
は「やっぱりあなたもあたしを裏切るの？」
は「…」

は「ジャック、ジャック、急に消えた。ジャック、ジャック、それは何で？　ジャック、ジャック、どこに行った？」
は「…」
は「ジャック、蜘蛛の巣、囚われの蝶、あたし一人。ここはあたし一人。だからあたしが羽ばたいても、バタフライ効果は得られない。何も変わらない。誰も影響されない。あたしは一人のまま」
は「…」
は「だから、現実に」
は「だから、あたし、帰る」

暗転。

蜘蛛の巣5

蜘蛛の巣5

頬が痛んだ。骨が折れたわたしの頬。痛みがわたしを現実に引き戻す。

彼はにせものだ。

わたしは目の前の男を見つめた。頭の中を引っ掻き回した男。それによってわたしが答えをつかむとは考えなかったのかもしれない。

「もう来ないでください」

「え？」

天野先生には本当に理解できないのだろう。わたしはもう一度、ゆっくり言う。

「もう、来ないでください」

やっぱりわかってない。

「わたし、一人でも大丈夫です。だれもいなくても、自分の力で新しい世界を作れますから」

天野先生は少し口を開けたまま、動きを止めている。漫画みたい。こんな返事はまったくの想定外。そう、考えてもみなかったんだ。

「もう一度言いましょうか？」

「いや、いい。聞こえてる」

ようやく口が動いた。確かに聞こえてはいるのだろう。わたしは立ち上がって、笑ってみせた。

「今までありがとうございました。それから、この間はすみません。わたし、先生がいなくてさみしかったんです。そんなの言い訳にならないけど」

微笑んだ顔はいっそう醜く映るだろう。さっきまでの涙が汚らしく光っているだろう。でもわたしは、顔を隠すことをやめて天野先生に向かい合っている。

「それから卒業制作、わたしを外してください。学部生使って、自分の脚本でやってみたいんです」
「おまえが？」
今までよりももっと驚いた顔。当然だ。だれもが驚くだろう。天野先生が流した噂を信じている小泉くんや菅原くん、それに院生たちは何と言うだろう。やはり天野先生に破門されたと揶揄するだろうか。今まで与えられた仕事だけをこなしてきたわたしに何ができるのかと、興味本位で遠くから眺めるだろうか。
「構いませんよね。何か問題がありますか？」
「卒業制作の演出をやりたいんだったら」
「違います。脚本から自分で書いて、演出して、天野先生の世界じゃなく、わたしの世界を作りたいんです。もし卒業制作として認めてもらえないんだったら、それでもいいです。自分の劇団立ち上げます」
天野先生は笑おうとした。簡単にそんなことができるわけないじゃないか。声が聞こえたような気がした。でも言葉にはならなかった。彼は彼でショックを受けていて、笑い飛ばすことができないのだろう。全部自分の思い通りに、自分の脚本通りに進行すると思っていたから。
場当たりとキッカケ練習、きちんとやっておいたほうがよかったんじゃないですか？
わたしはおかしくて、くすりと笑った。笑えなかった天野先生は憤慨した。
「何がおかしいんだ」
「ごめんなさい」
突然、音楽が流れた。天野先生がジーンズの後ろポケットに手を突っ込んで、携帯電話を出した。ボタンを押して音を止める。
「忙しいんでしょ。もう帰ったらどうですか。明日の授業、準備しなきゃいけないでしょう」
わたしの声に、戸惑ったような表情を見せた。自分のペースが取

り戻せない、かわいそうな天野先生。
「わたしも明日から学校にちゃんと行きます。こんな顔でも、仕事はできますから。演出補。きっちり仕事させてもらいます。心配しなくても、人の噂も七十五日です」
天野先生のおしりを押すようにして玄関に出た。天野先生は何か言おうとしていたが、うまく言葉にできないようだった。
「それでは、ありがとうございました。あ、鍵、返してください」
納得のいかない表情で、それでも天野先生はすんなり鍵を返してくれた。コドモっぽい彼のことだから、もしかすると後で嫌がらせに何かしてくるかもしれない。わたしの芝居の妨害とか。
だけど卒業してから、わたしにはたっぷりの時間がある。自分の劇団を持って、ゆっくり書けばいい。
蜘蛛の巣から出て、もう一度はじめから。次はだれかの世界ではなく、自分の世界を作るために。
台所の隅に、実家から送ってきた段ボールが置いたままになっていた。段ボールの側面には大きく、「わかさいも」と書いてある。
甘い甘い、わかさいも。
二度目の大学生活を、まったく違う自分を使って過ごすことだって、わたしにはできる。わたし自身さえここにいれば。
パソコンを起動した。ワープロソフトを立ち上げる。そして初めての、自分だけの脚本を書き始めた。

ヤングポテト・セカンドフライ

幕は、自分で上げる。

ヤングポテト・セカンドフライ5

ヤングポテト・セカンドフライ5

「ちょっと入れ込みオーバーマンだったけど、はる子のじゃがいも根菜部分も見れたんで大筋ＯＫ！　やっぱり第四層でのリンク時間は5分くらいが限界だね～。それ以上になるとやっぱり個を維持するのがとってもディフィカルト宗教！　心も体も一つに溶け合いたいって？　ギャハハ！　まあ君は１０分くらい彼女をブレインジャックしてダイレクトリンクしてたから、かなりはる子インフルエンザに感染るんです、パシャって感じだったしねえ。インタラクティブダイレクトリンクだとモンゴル男の正体がラーメン男だってばれちゃうから、あ、お久しブリーフに初代のらーめん喰いたいな、えーと、今回ははる子から君へのリンクに十二単フィルタをかましてワンウェイダイレクトリンクするしかなかったんだけど、この場合、ブレインジャックしている側の方が惚れ込みやすくなるってのは世界不思議発見だったよ。え？　恋はブラインドってやつ？　ハハハ。マイケル・ジョーダン、スラムダンク！　先生、インタラクティブダイレクトリンクがしたいですぅう、って馬鹿！　お前、彼女の名前、スプリングチャイルドを漢字で書いて『春子』だと勘違いしてたな。最後の方なんか『春貼るラハル』ってなもんで、気付かれやしないかと思って、冷や冷やヒヤシンス状態だったよ。だから君が『春』を連呼しかける前に、思わず電脳第四層ダイレクトリンクを強制切断しちゃいました！　ん～、君の『ｌａ春』祭りがなければ、最後まで彼女の考え方をキリングミーナチュラリーに誘導してあげられたんだけど、まあ、それは本人が自分で気付ければいいことだしね。え？　つまりだな、死は一つの可能性に過ぎないわけで、死に脅える必要はぜーんぜんないのよ。僕が見たかったのは生を肯定

した上で何をしたいかってとこだったわけ。それにしてもまあ、『１ａ春』祭り、あ、このフランス語ってあってるのかな？　まあいいや。で、『１ａ春』祭り、気付かれなくて君も皆もラッキーストライクだったね。え？　何だって？　声が、遅れて、聞こえるよ、ああ、スマンスマン。部長？　ああ、無し無し。僕がゾッコン続行ラブ。いずれにせよ、第四層は脳深度が深すぎてさ、ダイレクトリンクを切った瞬間からはる子をモニタできなくなってたのよ。だから彼女の電脳ダイブも強制終了したんだけど、後遺症が残らなきゃいいね。え？　身体的には君もはる子も脳プロブレム！　君が僕の振りをして彼女に好き焼き代好き蝶愛しテルミーって言いまくったから、リアルに戻った彼女が僕ちゃんにホモ字だったらマズイって話。アハハ。うんうん、今回は鉄道世界初の国から衛星回線経由でお疲れ様、遅坂クン、チャオ」

（了）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9382i/

芋の上のクモ

2010年10月9日06時12分発行